

第3講 歴史主義：近代歴史学とその危機

レポート講評（2）：人はなぜ過去を記録するのか？

ほとんどのレポートは過去に教訓を求めるため、と書いていた。それ自身は間違いではないし、多くのメモワールが教訓を未来に残すために書かれてきたことは否定できない。しかし、教訓の前提になるのは過去が未来に繰り返されるという前提が成立しなくてはならないという問題が残る。もし過去は繰り返されることはないとするれば、過去は教訓たりうるのかという問いに答える必要がある。繰り返されない過去の教訓は逆に失敗につながるという側面はないのか。

教訓の亜種として過去に行動規範に基準や判断基準を求めるというレポートもあった。平安貴族の日記が残されているが、その中には宮廷での儀礼などが記されていて子孫に参考となるように考えられていたと言えるので、それ自体は決して間違いではない。しかし価値基準が変わったときにその有効性はどうなるのか。このような疑問も同時に求められるだろう。

少数ではあるが自己の存在を証明するためとか、自己が属する共同体とのアイデンティティを得るためというレポートもあった。古代オリエントの君主が自己の業績を碑文に残した動機が自らの偉業を後世に残すためであったということを見ると、このような解答もありなんということになるだろう。さらには、自分の子供にだけは親である自分がどのような人生を辿ってきたのかを知って欲しいという動機で回想録を書き残している事例もある。個人史の分野に属するのだろうが、このような記録は実際にはかなりの数が生産されているのではないかと思う。

あるいは自己存在の正当性、社会や国家の正当性を主張するために過去が記録されるというレポートもあった。プルタルコス英雄伝「ソロン」伝に、サラミス島の帰属をめぐるアテナイとメガラが争っていたときに、ソロンがホメロスの中にサラミスの英雄アイアスがアテナイ王の陣営の傍らに陣を張ったという一説を根拠としてアテナイの正当性を主張したという話が伝えられているのを思い起こすなら、過去は現代において政治的・外交的プロパガンダに利用されるのだということに気付かされることになる。その意味で。このような指摘は非常に鋭い洞察に富んでいると評価できる。

【本日の課題】 歴史学とは何か？

過去をあるがままに理解する（ランケ）

ジョージ・P・グーチ（林健太郎・孝子訳）『19世紀の歴史と歴史家たち』

（上・下）筑摩書房、1971・74年。

スコット『アイヴァンホー』の荒唐無稽さに衝撃を受ける

19世紀の科学としての歴史学

歴史家から歴史学者へ＝職業としての歴史研究者（大学）

史料批判（外的批判と内的批判）：近代の産物（文献学の発展）

権威と同時代性を基準

文献学の発展

『コンスタンティヌス帝の寄進状』：病気（ハンセン氏病）を教皇シルヴェステル1世の洗礼によって治癒・教皇に西ヨーロッパにおける支配権を譲る。

8世紀中ごろに東ローマ帝国の干渉に抵抗するために偽造←726年 レオン3世による聖画像崇拜禁止令をめぐる危機

ロレンツォ・ヴァッラによる批判（15世紀）

ローマ時代のラテン語の用法と異なる

テクニストをベネツィア大使の外交報告書（国家文書・行政文書）に求める←客観性を求める

『ローマ的ゲルマン的諸民族の歴史』（*Geschichte der romanischen und germanischen Völker von 1494 bis 1514*, 1824）

『近代歴史家批判』（*Zur Kritik neuerer Geschichtsschreiber*, 1824）

グイッチャルディーニを批判。事実の歪曲と誤認。二次史料に依存。

経験的に解釈と評価（経験主義的解釈学）

「本来いかにあったか **Wie es eigentlich gewesen.**」

事実を国民史の枠組みの中に埋め込む

ベルリン大学でゼミナール形式による授業

→歴史を外交史に特定（歴史主義の起源）

→公文書の主観性・プロパガンダ性・民衆を無視

→国家のイデオロギーを代弁

大学という教育・研究機関の存在

歴史学者の卵はどこで教育され、研究し、評価されていくのか。

大学という場の存在

教育を通じて方法論・社会的帰属意識・階級的価値観・国家観の共有

→ギルドの形成

国民国家を基礎とする外交史・経験主義的解釈学・外交官僚に対する信頼（君主や貴族層からも民衆からも自立し、価値中立的という信頼）

文化史論争（ランプレヒト：他者の排除）

教授資格 **Habilitation**(ギルドからの逸脱を規制)

参考文献

L・v・ランケ（山中謙二訳）『ローマ的・ゲルマン的諸民族史』

千代田書房、1948年。

ゲオルク・G・イッガース（中村幹雄・末川清・鈴木利章・谷口健治訳）

『ヨーロッパ 歴史学の新潮流』晃洋書店、1986年。